

大伴坂上郎女「尼理願挽歌」の構造

大 島 武 宙

七年乙亥、大伴坂上郎女、尼理願の死去を悲嘆して作る歌一首（并せて短歌）

栲づのの 新羅の国ゆ 人言を よしと聞かして 問ひ
さくる 親族兄弟 なき国に 渡り来まして 大君の
敷きます国に うちひさす 都しみみに 里家は さは
にあれども いかさまに 思ひけめかも つれもなき
佐保の山辺に 泣く子なす 慕ひ来まして したたへの
家をも造り あらたまの 年の緒長く 住まひつつ い
まししものを 生ける人 死ぬといふことに 免れぬ
ものにしあれば 頼めりし 人のことごと 草枕 旅な
る間に 佐保川を 朝川渡り 春日野を そがひに見つ
つ あしひきの 山辺をさして 夕闇と 隠りましぬれ
言はむすべ せむすべ知らに たもとほり ただひとり

して 白たへの 衣手干さず 嘆きつつ 我が泣く涙
有間山 雲居たなびき 雨に降りきや（3・四六〇）
反歌

留め得ぬ命にしあればしたたへの家ゆは出でて雲隠りに
き（3・四六一）
右、新羅国の尼、名を理願といふ。遠く王徳に感けて、
聖朝に帰化ぬ。時に大納言大將軍大伴卿の家に寄住し
て、すでに数紀を経たり。ここに、天平七年乙亥を以
て、忽ちに運病に沈み、すでに泉界に趣く。ここに、
大家石川命婦、餌薬の事によりて有間の温泉に行きて、
この喪に会はず。ただ郎女ひとり留まりて、屍柩を葬
り送ることすでに訖りぬ。よりにてこの歌を作りて、温
泉に贈り入る。

右は、大伴坂上郎女が、大伴氏の大納言家のもとに寄住していた尼・理願の死を悲嘆して作った長歌作品である。左注によれば、本作は、有間温泉に出かけていた・母石川命婦に贈られたという。長歌は理願という人物の生前の行動からその死までを順を追って述べたのち、それを見送った郎女自身の嘆きが雨として降ったか、と命婦に問うて終わっている。反歌はその叙述のうちから理願の死に関する部分のみを抽出したかのようだ。

本歌は、いくつかの点からその特殊性を指摘することができる。阿蘇瑞枝は左注に記された作歌の経緯や長歌末尾の問いかけ、反歌の「説明的表現」から、本歌に相聞歌としての性格を見出だした。重要なのはそのように書簡的、伝達的な意味を持つと考えられる点の、挽歌としての特殊性であろう。

また集中の挽歌は、臣下あるいは親族から歌われることを通例とするが、本歌が死者にとつて親族でも臣下でもない者からうたわれていることも注目に値する。しかも、作者の郎女、悲傷の対象たる理願、さらに歌を贈られる命婦に至るまで、関係者すべてが女であることも集中他に例を見ない。このことは、死者が尼という宗教者であったというこの特殊性とも関わる。そしてこれら外延的な特殊性

は、歌句の構成とも無縁ではありえない。

特殊とは差違の保有の謂いであり、差違は共通性を前提とする。本歌の場合、すでに諸注釈に指摘されてきたような人麻呂作歌などの歌句の共通性を軸としながら、それらとの用法の差違を明確にすることで、その特殊性の所在が明らかになるだろう。そのためには、本歌が常套表現の織物であることを越えて、独自に生起させる文脈を把握することが不可欠であり、さらにそのためには、題詞、左注の語る作歌事情への留意が欠かせない。具体的には、理願の生前と死後の様子がどのようなものとして描かれているか、その死に際会した郎女と命婦の交感がどのような意味を持つのか、が課題となる。

一 理願挽歌の位置

本歌をめぐる状況を確認することから始めたい。左注によれば、理願は新羅から渡来した尼で、「大納言大將軍大伴卿」（安麻呂）の家に寄住すること数十年の後、天平七（七三五）年に病で没したという。尼の渡来については、たとえば『日本書紀』持統称制前紀に「閏十二月に、筑紫大宰、三国、高麗、百濟、新羅の百姓男女、并せて僧尼六十二人を献れり」とある。また天武十三（六八四）年五月には百

済の僧尼と俗人の武蔵移住、持統元（六八六）年には筑紫大宰に献された新羅の僧尼と百姓の武蔵移住の記事が見え、天平宝字二（七五八）年には「帰化りし新羅の僧世一人、尼二人、男女十九人、女廿一人」が武蔵国に移され、新羅郡が設置されたという。勝浦令子は『元興寺絵巻』や『三宝絵詞』に触れて、六、七世紀の渡来系老尼の影響力を指摘し、これらの移住記事についても「この中には尼寺居住の尼とは異なる、家などに居住する老尼もいた可能性がある」という。

天平宝字二年の記事の「帰化」の表現は左注にも見え、理願の渡来は「遠く王徳に感けて、聖朝に帰化ぬ」と語られる。文脈上、これは長歌の「人言をよしと聞かして、問ひ放くる親族兄弟なき国に渡り来まして」の部分に対応すると考えられる。ただし長歌と左注の叙述は、完全に一致するわけではない。

「人言」は原文「人事」だが、『代匠記』初稿本が「人事」とは書たれとも人言なり」として以来、人の発言を指すとする説がひろく採られてきた。理願が他の人々の言によつて「大君の敷きます国」を「よし」と聞きつけた、と解するのである。だが「奥つ城をこことは聞けど」（3・四三二）や「妹すらを人妻なりと聞けば悲しも」（12・三二一五）、

「賢し女をありと聞かして」（記上・二）など類似の例を参照すれば、「AをBと聞く」は「AがBである」ということを聞く」の意で解すべきと考えられる。すなわちこは、理願が「親族兄弟なき国」の「人言」が「よし」であると聞いた、の意と解されるのである。左注の「遠く王徳に感けて」とは異なるかたちで、日本という異郷の美点を知ったことを、渡来の動機として示す表現と見られる。

左注には、理願が佐保大納言家に「寄住」していたと記される。一方で長歌では、理願は「佐保の山辺」に「しきたへの家をも作り」、そこに「住まひついましし」とうたわれている。自らそこに家を建て、住していたのである。これも、長歌と左注の叙述の不一致と認められよう。

僧尼の居住地については天平八（七三八）年十月の記事が注意される。

是の月に、勅して曰はく、「凡そ諸の僧尼は、常に寺内に住りて、三宝を護れ。然るに或いは及老い、或いは患み、其の永に狭き房に臥して、久しく老疾に苦しむる者は、進止便あらず、淨地亦穢る。是を以ちて、今より以後、各親族と篤信者に就きて、一二の舎屋を間処に立て、老者は身を養ひ、病者は薬を服へ」とのたまふ。

高齢、病人以外の僧尼は寺内にいるように、という勅であり、本歌はこれから五十年ほどくだる。理願は寺内に在してはいなかったらしいので、この勅の内容に直接には該当しない。しかし勝浦⁵によれば「八世紀の皇族・貴族の「宮」や「家」にも、多くの僧尼が入りたり、居住し」たりしていたという。長歌は、理願が「親族兄弟」のいない国に渡来したと述べているので、坂上郎女や石川命婦ら大伴氏の人々は、理願に対する「篤信者」の立場にあつたと考えられる。

そして、歌に関係する全員が女であることは、尼を中心とした女同士の連帯を示唆する。その背景には「五障」や「変成男子」にみられるような仏教思想の女に対する差別的な性格を想定することもできよう。勝浦⁶はこれらを説く『法華経』提婆達多品が教学的に重視されていなかったとしてその影響を限定的なものと考ええる。しかし長歌も左注も、理願の死に際会したのが郎女「ひとり」だったことをことさらに述べ、歌が贈られた相手としては旅中の人々のなかからひとり命婦が選択されている。こうした限定は、女のみによる強い信仰上の紐帯を表すと見るのがむしろ自然である。

二 不可解なる理願

ここまでの叙述は、亡き理願のかつての渡来の状況を簡潔に示す。「人言をよしと聞かし」ただけで、親族も居ない見ず知らずの国に「渡り来まし」たことが、「而」の字の反復によって順序立てて語られている。しかし、さらに長歌を読みすすめると、「大君の」以下「いましものを」までの部分も理願の生前の様子を示しながら、特にそこに「いかさまに思ひけめかも」の語句が含まれることで、理願の行動の意図や動機は俄然、不明の度合いを高めている。ここに人麻呂挽歌の表現との共通性も差違も存するだろう。「いかさまに思ひけめかも」の句に表明される疑念は、具体的な歌の表現としてはどこにかかるのか。『全註釈』は「カモは疑問の係助詞」としたうえで「この係りは、泣く兒ナス慕ヒ來マシテに懸かつているが、独立句としての性質が強くなっている」という。しかし木下正俊⁷が指摘するように「けめかも」や「けめか」の集中の四例のうち三例が明確な連体形の結びを持たず、「(已然形) + パ + カモ、あるいは(已然形) + カモなどを正格というならば、変格と呼ばれるべき性質のもの」と考えられ、活用形に拘泥せず、意味のうえで語句の関係を把握することも必要となる

う。

この「いかさまに思ひけめかも」の及ぶ範囲をめぐっては、説の対立がある。『全注』（巻三・西宮一民）は「この挿入句「いかさまに 思ひけめかも」は「慕ひ来まして」にかかり、さらに「隠りましぬれ」にまでかかっている」とし、『釈注』や『和歌大系』がこれに従う。理願の生前の行動のみならずその死までが郎女による反問の対象になっていると考えるのである。一方で『注釈』は「ここは上の奈良の都に人家軒を並べた事をうけて、さうした繁華の都でどこに住まうも意のまゝであるが、その中で特に山邊の家を選んだ事に対してこの句をさしはさんだ」とし、『岩波文庫』は「つれもなき」が挽歌に多く見られることに注意しつつ「ただし、それらは山の陵墓への葬送を嘆く句であり、ここは、新羅から大和の佐保の山辺に、どういふつもりで来たのかと不審に思うという文脈に応用している」という。反問の対象を理願の生前の行動に限定してとらえるのである。

集中の挽歌の通例では、「つれもなき」は、殯宮や葬地が普段の生活と縁の無い場所であることを表わす⁸⁾。しかし本歌の「つれもなき」は理願の寄住先である「佐保の山辺」に関して用いられているのであり、理願の死と直接には関

わらないことは明白である。ならば「いかさまに」も、通例とは異なる文脈を生じさせているのではなからうか。

「いかさまに」を伴って意向を問う表現は、本歌を含めて七例あり、人麻呂の近江荒都歌（1・二九）を除く六例すべてが挽歌に用いられている。

：いかさまに 思ほしめせか（或は云ふ「思ほしけめか」）天ざかる 鄙にはあれど 石走る 近江の国の
楽浪の 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ 天皇
の 神の尊の 大宮は…（1・二九）

：いかさまに 思ほしめせか 神風の 伊勢の国は
沖つ藻も なみたる波に 塩気のみ かをれる国に
うまこり あやにともしき 高照らす 日の皇子（2
・一六二）

：いかさまに 思ほしめせか つれもなき 真弓の岡
に 宮柱 太敷きいまし みあらかを 高知りまして
朝言に 御言問はさず 日月の まねくなりぬる：
（2・一六七）

：いかさまに 思ひ居れか…時ならず 過ぎにし見ら
が 朝露のごと 夕霧のごと（2・二一七）
：いかさまに 思ひいませか…うつせみの 惜しきこ
の世を 露霜の 置きて去にけむ…（3・四四三）

…いかさまに 思ほしめせか…つれもなき 城上の宮
に 大殿を 仕へ奉りて 殿隠り 隠りいませば…

(13・三三二六)

上掲の例のうち、不明瞭な点を残す一六二番歌を除く四例において、「いかさまに」以下の句は世を去った死者の意図を疑う表現をなす。しかし近江荒都歌の「いかさまに思ほしめせか」は「石走る近江の国の…天の下知らしめしけむ」という遷都の表現にかかり、すでに亡き者に対する、応答を期待しがたいような問いかけである点は共通するものの、死去という事態への反問ではない。

本歌の文脈はどうか。まず直後の「里家はさはにあれども」が注意される。このような「択一的表現」は集中に多く、何らかの範疇に属するものが多数存在することを逆接の「ども」とともに示した上で、その中から特定のひとつが抽出される展開を示す。

やすみしし 我が大君の 聞こし食す 天の下に 国
はしも さはにあれども 山川の 清き河内と 御心
を 吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に…(1・三

六 人麻呂)

この「吉野讃歌」では、さまざまな「国」があることが示された上で、他でもないこの「吉野の国」が取り出され

ている。

本歌の「里家はさはにあれども」も類似した文脈を構成するが、全く同じではない。前後の表現をたどれば、「里」と「家」についてそれぞれ対応が把握できる。「里」は「さ」にあれども、「理願はその多数の「里」を選択せず、「つれもなき佐保の山辺」を選んだ。「家」も多数あるというのに、「しきたへの家をも作り」、すなわち「家」を選んで住するのではなく、みずから「家」を作ってしまったという。集中の「択一的表現」が多数から特定のひとつを選び出すのに対して、理願は一つを選ぶのではなく、みずから新たな選択肢を設定し、それを採ったというのである。

その文脈に挿まれてあるのが「いかさまに 思ひけめかも」の疑念である。むしろ、このような展開こそが「いかさまに」の句を要請したと見るべきだろう。表現としては、「都」でなく「佐保の山辺」に來たうえ、そこに起居する「家」を建てた、そういう理願の行動の不可解さが強く打ち出されている。

その他の語句も、この不可解性の表現に寄与する。「泣く子なす」は『代匠記』初稿本が「ちこのおやをしたふことくなり」とし、『全註釈』が「枕詞。泣く兒のように」と解説して以来、諸注おおもねこれを出していない。しかし集中

の全四例^①いずれにおいても、こちらの予期や期待に反する行動を述べるにあたり、むりやり、どうしても、というよ
うな含意を持つ。

さらに視野をひろげるなら、「問ひさくる親族兄弟なき国
に」と「つれもなき佐保の山辺に」の対応も見えてくる。「語
り放け見放くる人目乏しみと思ひし繁し」(19・四一五四)
の例に従えば、「問ひさく」は、出家者たる理願が、時に遠
く語りかけることを指しているよう。理願が渡来してきたの
は、そのように語りかける「親族兄弟」すらない国なのであ
った。ただでさえそのように心細い状態であるのに、
理願はさらに人々の集住する「都」でもない「つれもなき
佐保の山辺」に立ち至るのだ。

ここでは、「問ひさくる親族兄弟なき国に」の方向性を「つ
れもなき佐保の山辺に」が増幅する。さらに理願は「里家
はさほにあ」る都ではなく、「つれもなき佐保の山辺に」移
り、そこに「しきたへの 家をも作」という。そうした、
自分を集団から遠ざけるような行動が、「いかさまに 思ひ
けめかも」の表現によっていぶかられているのである。

このように文脈をたどることで「いかさまに 思ひけめ
かも」が長歌の前半部において歌句を緊密に結びつけてい
る様相がうかがわれる。一方で、『全注』が注目する「夕闇

と隠りましぬれ」の方は、「生ける人死ぬといふことに免れ
ぬものにしあれば」、すなわち生者必滅の理によって納得
されたうえで提示されており、いぶかられることがない。
「いかさまに思ひけめかも」という反問の対象となる範囲
は生前の理願の行動に限定される、という『注釈』などの
説が肯われる所以である。

三 死に至る順接

ただし『全注』ほか「いかさまに 思ひけめかも」は
「夕闇と 隠りましぬれ」にまでもかかると考えた理由は、
長歌の叙述が前後半で連続性、一貫性を持つているように
見えることにもあるのではないか。理願の生前を語る前半
部に「よしと聞かして(吉跡聞而)」、「渡り来まして(渡来座
而)」、「慕ひ来まして(慕来座而)」、「住まひつしまししも
のを(住乍座之物乎)」とあり、葬送をうたう後半にも「春
日野をそがひに見つつ(背向尔見乍)」、「あしひきの山辺を
さして(山邊乎指而)」と、双方に「而」「乍」字が現れて
いる。また尊敬の「ます(座)」もくり返し使用され、「言
はむすべせむすべ知らに」以降、のこされた郎女の状況へ
叙述が転じてゆく直前までは、類似表現のくり返しが文脈
の連続性を感じさせている。

さらに「渡り来まして…佐保の山辺に」と「朝川渡り：山辺を指して」においては「渡る」と「山辺」が重出する。前者の「山辺」が「都」との対比を示すことはすでに述べたが、この語は孤愁を感じさせる表現として、特に家持歌に頻用される。「渡る」ことを経て「山辺」に到着していた理願は、ここでふたたび「渡る」ことで「山辺」へと去ってゆく。「佐保の山辺」が実際には大伴氏の居住地であったとしても、歌の表現としては理願の死の前後における状況の不変性を示す作用が持たされていると見える。あたかも、数十年の「佐保の山辺」の生活も、理願には仮の宿りに過ぎなかった、と言うかのである。

小野寺静子⁽¹⁴⁾が「人麻呂を踏襲しているが違いがあり、挽歌における死への驚き、生者と死者との隔たり感が薄れ、死への畏敬が軽い」と述べるのは、右のような生前と死後の状況の表現の連続性によってなのである。しかし一方で、本歌は生から死への移行という動き自体を曖昧にしているわけではない。むしろ本歌は、集中の挽歌のなかでは特異なまでに死ということを強調している。万葉挽歌は死去の表現に「隠る」、「過ぐ」などを用いて「死ぬ」を用いず、挽歌的に悲傷される対象の喪失は「死ぬ」の語で言表しうるものではないと考えられる。⁽¹⁶⁾本歌でも、理願の死

そのものは「隠りましぬれ」と述べられる。しかしこれは「生ける人、死ぬといふことに免れぬものにしあれば」の帰結としてある。「死ぬ」ということからは逃れられないものだから「隠る」ことになった、と述べるのは、理願は「死ぬ」ことになったと言うのも同然だろう。挽歌的な喪失とは異なる、まさに「死ぬ」というそのことが述べられようとしている。

生前と死後の様子の不変性を示しながら、死ということに強調する。この、方向性を異にする二つの表現上の特色は、相補的な関係にあると考えることも可能だろう。生前と死後の連続性を言うためには、その境界を画する死という事態が前提として必要になるし、また死ということが意味を持つのはその前後を連続したものと認識する視点があるからである。そこで、この「死」を明確に言表する部分⁽¹⁵⁾が、長歌の流れにおいてどのような文脈を構成しているのか、が問題となる。

「生ける人、死ぬといふことに免れぬものにしあれば」について、「講義」は「生まるれば遂にも死ぬる物にあればこの世なる間は楽しくをあらな」(三・三四九)の上句との類同性を指摘する。しかしこの旅人の讃酒歌が生者必滅の理を説くのは、下句で享楽の勧奨を導くためであり、理願

の死去の表現を導く場合とは性質を異にする。死去表現に至る順接に注目するならば、参考になるのは人麻呂の泣血哀慟歌であろう。

…春の葉の しげきのごとく 思へりし 妹にはあれど 頼めりし 児らにはあれど 世の中を 背きしえねば かぎろひの 燃ゆる荒野に 白たへの 天領中 隠り 鳥じもの 朝立ちいまして 入日なす 隠りに しかば…(3・二一〇)

ここでは、「妹」が生き続けることへの期待が裏切られたことが、「妹にはあれど」、「児らにはあれど」の逆接と「世の中を 背きしえねば」の順接によって導出されている。本歌の「住まひつづいましてしものを」の逆接と、「免れぬ物にしあれば」の順接にも、同様の抑揚は認められよう。喪失の不条理性と順直性が並置されることで、逆接に示される不如意を、順接に示される得心が覆うのである。

しかし二一〇番歌が、喪失以前の状況の存続に対する信頼のたしかさを示し、それが死によって裏切られる暗転によって状況の変化を強調するのに対し、本歌の表現はむしろ前後の状況の不変を印象づけている。それによって同様の叙述の流れにも、異なる意味が付与されていると思われるのである。「住まひつづいましてしものを」の逆接は、「い

かさまに思ひけめかも」による疑念の表明と連続する位置にあり、反問を招くような不可解な様子であったのに、と逆接を示したのちに、しかし生死の原則は逃れえないものだから、と順接を示して死去の表現が導かれている。とすれば、「生ける人…ものにしあれば」は、その直前までに述べられた理願の行動の不可解とは対照をなして、死という事態への理解の容易さを強調していると解されよう。二一〇番歌が喪失の前後の状況の明暗を描き分けているとするならば、本歌は生前の行動と死去のそれぞれに対する、納得の難易の落差を強調し、そのことがかえって悲傷の契機をなしている。人麻呂にとっては生死の原則を逃れられないことが直接に悲傷の契機だったが、郎女にとってはその原則はむしろ自明である。仏教的無常観の受容にも差違が見られるのである。

あらためて「いかさまに」および「つれもなき」の本歌における位置に触れるならば、死者の生前の行為について用いられる点では、朝廷に縁の薄い夷の地、近江への遷都を執行した天智天皇について「いかさまに思ほしめせか」といぶかった、人麻呂の近江荒都歌(1・二九)の例との相同が注目されよう。そこで天皇の行為が「はかりがたき叡慮」(『代匠記』初稿本)を示しているように、理願の生前

も、凡人の思慮を超えたものとされているのであった。そのように不可解なまでの特殊性を持つ存在までもが、無常から逃れえないということ、理解しがたいものをも流し去る原理があまりにも当然であることが、悲傷をもたらししているであろう。

人や物の状態が一定せず、その不定の変転のなかでひとときむすばれた関係がたちまちに解消されてしまうことが悲傷をもたらすという点では、配列の直後で家持が「うつせみの世は常なし」(3・四六五)、「跡もなき世の中なれば」(四六六)とうたったうえで「家離りいます我妹を留めかね山隠しつれ心どもなし」(四七一)と詠ずるに至ったのも同質の叙情と見てよいし、憶良は哀世間難住歌に「常盤なすかくしもがもと思へども世の事なれば留めかねつも」(5・八〇五)とうたっている。不断の流転を原則として受認しつつ、それに耐えられない情の様相を述べ、事物が変転してやまないという仏教的な観念を説くことは、尼としての理願の役割でもあっただろう。それを理願は自身の死によって身をもって示したと、本歌は告げる。

四 三者の感応

歌は、理願が、孤独であることをも辞さない宗教者であ

ったことを示唆している。「親族兄弟なき国」に渡来した理願は、その死のときも「頼めりし人のことごと」の不在のなかにあり、このこともまた、すくなくとも異例づくめであった理願の生前に比べれば、順当のこととして受容されている。理願が「親族兄弟なき国」に渡来し、「里家はさにはある」都をも避けて佐保にやって来て、さらに「頼めりし人のことごと」が旅にあるうちに死したということ、郎女が「ただひとりして」嘆き涙を流したということ、無縁ではあるまい。これを起点に、理願、郎女、命婦をつなぐ紐帯の様相をたどることができる。

「頼めりし」の語は『代匠記』精撰本が「理願ガタノミシ人々ノ、有馬ノ湯ニアル間ニナリ」として以来、「頼む」ことの主体を理願、その対象を大伴氏の人々とするものが通説となっている。たしかに尼である理願は、生活上のこととは「篤信者」たる坂上郎女や石川命婦に頼っていただろう。しかし前出二一〇番歌には「頼めりし兎らにはあれど」とあり、のこされた者が死者を「頼み」に思っていたという。「大舟の思ひたのみて」(2・一六七など)も同様である。理願について、みずから「家をも作り」と表現してその自立性が示されていたことからすれば、逆に大伴氏の女たちによる帰依のことを「頼めりし」と述べたと見ることも可

能ではないか。

理願を見送ったのが郎女ひとりであつたことは長歌に「頼めりし人のことごと、草枕旅なる間に」および「言はむすべせむすべ知らに、たもとほりただひとりして」とあることから知られる。これらは左注の「ここに、大家石川命婦、餌薬の事によりて有間の温泉に行きて、この喪に会はず」および「ただ郎女ひとり留りて、屍柩を葬り送ることすでに訖りぬ」に対応するだろう。孤独に生き、孤独な状況で死した理願に対しては「ただひとりして」嘆き涙を流した郎女の孤独こそが共感を与えうるのであろう。

本歌は「いかさまに」の句を中心として理願の行動に疑念を表明し、これを不可解なものとして扱う一方、かように理願と郎女の状況に孤立という共通性を見出だすことで、共感的な関係の表現を構築する。そしてその志向は、長歌末尾の「雨に降りきや」に至る展開において、郎女と命婦との間の共感へと軸足を移す。それによって長歌の全体は、不可解の強調から共感の構築へ、転回を完遂するのである。

長歌末尾の「嘆きつつ我が泣く涙、有間山、雲居たなびき雨に降りきや」の表現は、郎女から命婦への問いかけと見え、左注の「よりにてこの歌を作りて、温泉に贈り入る」

という記述に対応させうる。「涙」が「雲居たなびき」、そして「雨」として降るといふ表現について、諸注釈は八千矛命の「汝が泣かさまく、朝雨の霧に立たむぞ」（記上・四）や「泣く涙こさめに降れば」（2・二三〇）、「大野山霧立ち渡る我が嘆くおきその風に霧立ち渡る」（5・七九九）との類似を指摘する。土橋寛が「雲や霧は人間の靈魂の姿（氣息靈）として見られ、嘆きの息が霧となって立つという觀念」の存在を指摘し、また伊藤博が「「霧」を人間の「嘆き」の表象と見る発想が普遍的に存在した」としたことを受けて、小野寺静子は「雨を涙の表象とする点、「理願挽歌」はむしろ八千矛の歌に近い」という。一方、東茂美は人麻呂歌集歌で霧や霞について用いられる「霏」字が漢籍では涙の様子にも用いられることから、中国詩文からの影響の蓄積を見る。いずれも「涙」と「雲」、「雨」の関係が注目されている。

だが、この「雨に降りきや」が独白的な叙情ではなく、相手の認知を問い、反応を想定する形式であることにも注意を要する。大野晋は集中で「文末のやは助動詞ツ、キ、ベシなどの終止形を承けている」が「文末の力にはそうした例はない」ことから、文末の力は「判断不能であるとして表明する」もので、やは「確信、または見込を持ってそ

れを相手に問い質す」という区別があるとする。また大野は本歌をとりあげ、「私の涙は有間山の雲とたなびいて、そちらに雨となつてきつと降りましたね」と訳文を付すべきという。同様の「きや」の例は集中にこのほか七例²²ある。大野は特に本歌と三二六八番歌をとりあげて次のように述べている。

キという助動詞は回想の助動詞であり、自分にとって、確実な記憶のあることを表明するのに使うことが多い。ところがそのキがここでは、自分自身に見えない、記憶のあるべくもない相手の事態について使われている。それは、その事態が自分にとって確実と思われるので、確実な成就の記憶を表わすキによってそれを表明しているものである。

このとき、「自分自身に見えない、記憶のあるべくもない相手の事態」を「自分にとって確実と思われる」こととして表現することは、そのまま、自身と相手との間の共感関係、紐帯の存在を明示することにつながるだろう。キが回想性を介在させることで、「ほととぎす鳴きてさわたる君は聞きつや」(10・一九七六)、「春雨にこもりつつむと妹に告げつや」(18・四一三八)のような「つや」の表現との差違も生じてくる。本歌においては、問う郎女と問われる命婦

の、母子関係というのみにとどまらない関係の特別性を表現の背後に想定させるような作用が感取される。

自身の情が雲霧などの自然的な事象とむすびつけられるとき、自身から遠く離れた相手にもそれが感知されることが求められていると思われる例は、「君が行く海辺のやどに霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ」(15・三五八〇)など、天平八(七三六)年の遣新羅使人関係歌に頻出する。これらの表現は、それぞれ「嘆く」ことの強さを言うのみならず、こううたうことよって嘆く側とそれを感知する側の心情的な関係の深さを示そうとする。

本歌の表現は、「きや」の特性と、自身の情が自然的な現象に化して他の者に認知されることを期待する表現の特性を併せ持つ。いずれも郎女と命婦の間の紐帯の強調に寄与すると考えられ、またこうして郎女と命婦の情意の連動が示唆されることにより、「いかさまに思ひけめかも」といふかられるほどの理願の生前の行動に対する驚嘆ないし尊崇の念も二人に共有されるべきものだったと思わせる。二人は、理願の行動は理解を超えていた、という点において相互の理解を構築しているのである。そこに、理願という特異な存在を中心とする、女のみ関係が浮かび上がる。

五 結語

『私注』は本歌について「話の筋はよく分かるが、作者の感動のクライマックスと言ふ所もなく、平板な作となつてしまつて居る」という。たしかに、述べたように理願の死去の以前と以後は連続性を感じさせ、本歌が理願の死を、状況を一変させる出来事として扱おうとしているとは考えにくい。もちろん理願の死は悲嘆の契機としての意味は持つが、表現の関心は、把握される出来事に対する承服の難易にあると考えられる。「いかさまに」を中心とする文脈

によれば、理願という尼の生前の行動は不可解なまでに特別なものであった。それに比すれば、誰しも逃れえない生者必滅の原則は容易に理解できる。死の不可解性は理願という存在の不可解さによって存在感を薄め、死の不条理性は「たのめりし人のことごと」以下でわずかに表明されるのみだ。このことが、歌句の用法の特殊性に結果している。

反歌一首は「留め得ぬ命にしあれば」とその原則をふたたび提示したのち、「しきたへの家ゆは出でて雲隠りにき」と、原則に順当に従つて「家」を去つたと述べる。「雲隠りにき」により、郎女が最後まで理願を見送つて、尼がもうこの世にたしかにいなかったことが命婦に言い送られ

ている。

みずからに孤独を課してゆくような理願の生前の行動の意図は、郎女や命婦にとっては理解が困難なものとしてあつた。しかし、さらに理願がその死のときにも孤独のうちにあつた、という事態に、みずからも孤独のうちに際会した郎女は、その意義をようやく理解することができた。生きてある者は必ず死するという原則の当然さを、理解を超えた行動を展開する存在さえもその例外でないということを実地に知ることによって、理解したのである。

理願の強い意志のために結ばれた郎女との縁であつたが、無常という強力な原理によってそれは断ち切られた。ひとりやってきた理願は、またひとり去つてゆき、また人間は、死ぬときは一人である。そのことをひとり、正面から受け止めつつ、現世に残された者同士の紐帯を求める郎女の悲嘆は、雨とともに母のもとに贈られるのである。

【注】

(1) 「大伴坂上郎女」(古代文学会『万葉の歌人たち』一九七四年、武蔵野書院)。

(2) 「妻の出家・老女の出家・寡婦の出家」『女の信心』(一九九五年、平凡社)。

(3) 毛利正守「大和三山歌『雲根火雄男志等』考」(『万葉の風土・文学』一九九五年、塙書房) はこの箇所を「世間を憂しと思ひて」(13・三三六五) などとともにあげ「ヲを伴なう形容詞終止形の場合、助詞トのあとに引用動詞(思惟動詞・伝達動詞など) が位置する」と述べる。

(4) 松田浩「万葉の「人言」」(『日本文学』二〇〇七年五月) は「ここでは「人言」は王徳を感受せしめるものとしての機能を「持つ」とし、さらに仁徳紀の「頌音」「頌徳」につらなる意義を指摘している。ただし、長歌と左注の記述が逐一対応しているわけではないことから、このような比定には慎重を期したい。

(5) 『古代・中世の女性と仏教』(二〇〇三年、山川出版社)。

(6) 勝浦前掲注(5)書。

(7) 「けめかも」考(『万葉集語法の研究』一九七二年、塙書房)。

(8) 2・一六七、2・一八七、13・三三三六、13・三三三一。

(9) 岩下武彦「人麻呂の吉野讃歌試論」(くにはしも さはに あれども) 考(『国語と国文学』一九八二年十一月による)。

「さにはあれども」(3・三三三二、5・八九四、6・一〇五〇)、
「多くあれども」(6・一〇五〇)、「満ちてあれども」(13・三三四八、13・三三三四)、「しじにあれども…さには行けども」(17・四〇〇〇)、「あまたあれども」(17・四〇一一)

の例がある。なお、「村山有等」(1・三) はムラヤマアリトと訓み、除外する。同歌に選択的発想が認められないことは、亀井孝「埋もれた言語と埋もれた訓話」(『亀井孝論文集4』一九八五年、吉川弘文館)、鉄野昌弘「舒明天皇の国見歌」(『セミナー』万葉の歌人と作品第一巻)一九九九年、和泉書院)による。

(10) 清原和義「大伴坂上郎女と卷十三考」類型と創意(『武庫川国文』一九七九年十一月) が「しきたへの」という一般語に抛りつつ、背後にその一般の用法に起因する枕・袖・髪・床などの意味を重ねて持つて、生活する場としての家を「しきたへの」なる語で示そうとしたものと思われる」とした見解が首肯される。

(11) …しらぬひ筑紫の国に泣く子なす(泣子那須) 慕ひ来まし
て…(5・七九四)

…里人の行き集ひに 泣く子なす(鳴兒成) 行き取りさ
ぐり…(13・三三〇二)

…名を問へど名だにも告らず泣く子なす(哭兒如) 言だに
問はず…(13・三三三六)

…浜辺より浦磯を見つつ泣く子なす(奈久古奈須) 音のみ
し泣かゆ…(15・三六二七)

(12) 「問ひさぐる」は『代匠記』初稿本が「こと、ひてうれへを

さけてなくさむるなり」として以来、『楓落葉』、『佐佐木評釈』、『新全集』などが、言葉を交わして心を晴らす意に解するが、集中の「見さく」全二例（1・17、19・四一五四）などを見ても、距離を隔てた対象に向けた行為を示すという以上には意味を想定しがたい。『注釈』が「それによつて心の憂ひをはらしやる結果にはなるが、「問ひさく」「語りさく」はたづねてやり、物を言ひやり、することと見るべきである」とするのが当を得ていよう。

(13) ひさかたの雨の降る日をただひとり山辺に居ればいぶせかりけり（4・七六九）

山彦の相とよむまでつま恋に鹿鳴く山辺にひとりのみして
ふ（8・一六〇二）

あしひきの山辺に居りて秋風の日に異に吹けば妹をしそ思ふ（8・一六三二）

(14) 「尼理願の死去を悲嘆する歌」（『セミナー万葉の歌人と作品』10）二〇〇四年、和泉書院。

(15) 森本健吉「万葉挽歌の敬避性」（『国語と国文学』一九四〇年十月）、青木生子「山上憶良の歌における「死」（『萬葉挽歌論』一九八四年、塙書房）など。

(16) 茂野智大「萬葉挽歌における死別表現―挽歌的なるもの―」（『萬葉』二〇一九年三月）。

(17) 「国見の意義」（『古代歌謡と儀礼の研究』一九六五年、岩波書店）。

(18) 「嘆きの霧」（『万葉の発想』一九七七年、桜楓社）。

(19) 前掲註（14）論文。

(20) 「霏」の詩想」（『大伴坂上郎女』一九九四年、笠間書院）。

(21) 「万葉集におけるカトヤ」（『万葉集研究 第十四集』一九八六年、塙書房）。

(22) 「夢に見えきや」（4・七二六、11・二八二二、12・二八七四、12・三二一一）、「妹に見えきや」（10・一九九六）、「家に至りきや」（13・三二六八）。

(23) 秋さらば相見むものを何しかも霧に立つべく嘆きしまさむ
（三五八二）

我が故に妹嘆くらし風早の浦の沖へに霧たなびけり（三六一五）

沖つ風いたく吹きせば我妹子が嘆きの霧に飽かましもを
（三六一六）

